

ぼくたちと駐在さんの700日戦争

2008(平成20)年1月30日鑑賞<GAGA 試写室>

★★★★



監督＝塚本連平／原作＝ママチャリ『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』（高陵社書店刊）／
出演＝市原隼人／佐々木蔵之介／麻生久美子／石田卓也／加治将樹／賀来賢人／脇知弘／冨
浦智嗣／小柳友／坂井真紀／豊田エリー／倉科カナ／成嶋こと里／石野真子／竹中直人（ギ
ャガ・コミュニケーションズ配給／2008年日本映画／110分）

……7人のイタズラ軍団が最も輝いた時代はいつ……？ それは1979年。それはなぜ……？ 対立軸の存在、ストーリーの華、感動物語のキーとなる少女等々、13章500話を超える怪物ブログ小説が生まれた理由は明白！ 2008年の今、日本の若者たちに必要なのはこんなエネルギー。イタズラの良さと価値を再認識するためにも、大ヒットを期待しよう。

ブログ小説にもこんな怪物が！

正直に言うと、私はケータイ小説やブログ小説を基本的にバカにしている。そのため（？）、さらに正直に告白すると、ケータイ小説を映画化して若者たちに大ヒットした『恋空』（07年）も観ていない。

『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』は、アクセス・ランキング18カ月 No.1（記録更新中）の怪物ブログ小説。また今なお1日1回更新されていて、既に13章500話を超える超大作となっているらしい。しかも、前日に入れられたコメントによってストーリーが変化し、コメントを入れたユーザーをそのまま登場させるなど、ユーザー参加型ブログ小説のパイオニア的存在とのこと。その他、プレスシートを読むと、さまざまな部門で第1位のブログ小説。

そう確認したため、あえてその映画を観にいったのだが、なるほどこりゃ面白い！ もちろん、くだらないギャグがまじっていたり、バカバカしいほど誇張した演技が含まれていたり、私の気に入らない部分はあるが、高校生たちの青春ムービーとして面白いうえ、ある意味感動的！

なぜか、時代は1979年

私が『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』の試写に行こうと決めた理由の1つは、この映画が1979（昭和54）年を舞台としているから。この映画で「昭和54年、日本に起こった3大事件！」として紹介されるのは、①インベーダーゲームの大流行！②共通一次試験の開始！そして③ぼくたちと駐在さんの700日戦争!!! だが、③はもちろん後からつくったもの。

また、プレスシートにある「1979年に何が起こった!!!」を見ると、その統一テーマは「時代は熱かった」「あの頃、君は熱かった」。そして1979年最大のニュースは、「江川卓投手、巨人軍入団!!」というもの。また、1979年の流行語、ヒット曲、映画とくれば、懐かしさいっぱい。

ちなみにこの年は、1974年に大阪弁護士会に弁護士登録した私が7月に晴れて独立し、坂和章平法律事務所を開設した年。つまり1979年は事務所経営に全責任をもった弁護士としての私の新たなスタートとなった記念すべき年なのだ。そしてそれは、「イタズラ界の諸葛孔明」と呼ばれる、イタズラの天才ママチャリ（市原隼人）たちにとっても、イタズラ軍団（7人の侍）として、あの憎っき駐在さん（佐々木蔵之介）と対決する組織的かつ体系的な活動を開始した記念すべき年になったわけだ。

とある平和な田舎町、なればこそ……

ひとことで「いたずら」と言っても、それはピンキリ……。ちなみにこの映画では、坂井真紀扮する教師が職員室内にワックスを塗られたためパンティを見せながら滑ってしまうシーンや、ケガ人発生の急報を聞きつけて急いで現場に駆けつけた駐在さんが仕掛けられた落とし穴の中に見事に落とされるシーンなど、単純明快なイタズラ(?) がたくさん登場する。

しかし、プレスシートによると、「ブログに登場するイタズラは、もっと巧妙で、かつケガをさせない、つぐないができる、という大前提がある」とのこと。これは「脚本段階ではそこが引がかかった」ものの、「そのルールに縛られると、映像としてはつまらない。でも手のこんだイタズラだと、文章の場合は振り返れるけど、映像ではそうはいかない」と悩みながら、これらのシーンが実現したらしい。

ちなみに、こんなイタズラは、とある平和な田舎町なればこそ可能なものであるこ

とは明らか。「Monster・ペアレンツ」が大問題となっている2008年の今、現実こんなイタズラがあり、それを正面切って問題にする父兄が現れば、大変な事態になることは明らか。もっとも、ママチャリをリーダーとするイタズラ軍団のイタズラは、当初は前述のとおりワックス事件やバーバー吉田の看板を一字抜き去ることによってバーバーにする程度の、かわいいものだったが……。

面白さの秘訣は明確な対立軸！

日本で自民党と民主党の2大政党制がなかなか根づかず機能しないのは、両党の間に憲法や安全保障、外交という国家的課題について明確な対立軸がないため。つまり、民主党は左右のウイングの広い寄せ集め所帯だし、自民党だってハト派とタカ派が政権与党のうまみの中で共存共栄してきたにすぎないわけだ。

ところがこの映画では、とにかくイタズラをやりたいというイタズラ軍団の前に、断固それを許さないという国家権力をバックにした駐在さんが立ちはだかったばかりか、何とも大人げないことに(?)、彼はイタズラに対してはイタズラをやり返すという態度(暴挙?)に出たから、対立軸はきわめて明確。すなわちイタズラ軍団の目標は、イタズラの限界を超えない程度、つまり違法行為=逮捕という事態の一手手前までとことん駐在さんをやりこめることに設定され、他方駐在さんの目標は、イタズラをやられたらとことんやり返すということに設定されたわけだ。

こうなると、その戦いがエンドレスで次第にエスカレートしていくことは明らかだから、ブログ小説が今なお継続中であることもよくわかる。つまり、このブログ小説の面白さの秘訣は、明確な対立軸にあるわけだ。

ストーリーの華は加奈子、美奈子姉妹+ポインちゃん

イタズラ軍団は、次の個性豊かな「7人の侍」で構成されている。すなわち、①イタズラの天才ママチャリ、②喧嘩の強いエロガッパ西条(石田卓也)、③偏差値0?!の男孝昭(加治将樹)、④恋する星の王子様グレート井上(賀来賢人)、⑤一食2000kcalの食いしん坊千葉くん(脇知弘)、⑥女装もキュートな後輩ジェミー(富浦智嗣)、⑦ダブリ1年目・留年大王辻村さん(小柳友)。

前述のとおり、この映画の対立軸はこの7人のイタズラ軍団 vs. 駐在さんのイタズラ対決だが、そんな男ばかりのイタズラ合戦だけでは全然色気がないから、面白さが

長続きしないことは明らか。そこで登場するストーリーの華が、第1に叶姉妹ならぬ加奈子、美奈子姉妹。あの憎っき駐在さんには、何と昼間喫茶店で働く美人妻加奈子（麻生久美子）がいたうえ、東京の大学で星を学んでいるという妹の美奈子（豊田エリー）が夏休みにこの田舎



©2008「ぼくちゅう」PARTNERS

町へ星の観察のために滞在することになったわけだ。高校3年生(?)ともなれば、エロ担当の西条ならずとも色気ざかりは当然だから、まずは7人の侍たちは喫茶店のマドンナ加奈子にぞっこん。『夕風の街 桜の国』(07年)でシリアスな演技を見せた麻生久美子が、この映画では一変していかにもマンガチックなマドンナ役を楽しげに熱演……? さらに一目会ったその日から恋の花が咲いたのが、意外にも井上と美奈子。

おっと、もう1人忘れてはならないのは、ママチャリにホレているボインちゃんこと和美（倉科カナ）。彼女はこの映画では、ある事情でママチャリから「ブラジャーを貸して下さい」という奇妙な頼みを受けるだけの役割だが、きっと第2作、第3作(?)の物語展開では大きな役割を……。このように加奈子、美奈子姉妹とボインちゃんがストーリーの華となっているところが、この映画の面白さ……。

感動物語のキーはミカちゃん!

日本映画には難病モノの感動作が多い(?)が、このブログ小説にもそんな色彩が……。映画の前半、時々イタズラ軍団の前に顔を出し、時々そのイタズラの手伝いをしていた近所のかわいい女の子がミカちゃん（成嶋こと里）。ところが、ある日あるヒョンなことでバイク事故を起こして病院に入院した西条が、なぜかこのミカちゃんと病院で出会ってしまった。聞くところによると、ミカちゃんは重大な心臓病のため手術をしなければならないのだが、怖がって手術を受けたがらないらしい。

そこで、どうしてもミカちゃんに手術を受けさせようと西条があみ出した一計が、となり町の花火大会で上げる花火を病院のすぐ前で上げること。「そんなこと、できっこない!」とバカにするミカちゃんに対して、西条はある約束を……。ところが、

西条は目下ベッドの上で寝たままだから、そんな約束を果たすにはママチャリたちが頑張らなければならないことは明らか。また、その約束を果たすことは、ひょっとしてイタズラの限界を超えるのでは……？

そんな悩みを抱える中、ストーリーは次第にシリアスに……？ こんなブログ小説から生まれた映画に大きな感動があるとすれば、そのキーになる人物はミカちゃんだが……。

若者には、これくらいのエネルギーがなくっちゃ……

子供はみんなと遊んで育つもの。するとそんな中ではケンカやケガはつきもの。また中・高校生ともなれば、イタズラはもちろんケンカや多少の悪さもするもの。そんなことを言うと、今ドキたちまち大反撃をくらうだろうが、それが私の本音……。

ところが、今ドキの小学生や中・高校生はみんな一様に真面目で、一見優等生風。ケンカはもちろん議論すらせず、悪さはもちろんイタズラさえしない、没個性的な人間ばかり……。そんな風潮に対するアンチテーゼとして生まれたのがこの映画であり、その原作となったブログ小説。

許されるイタズラと許されないイタズラとの線引き、またイタズラですむ範疇と犯罪となる範疇との線引きはたしかに難しい。形式的に線引きをしてしまうと、何のイタズラもできなくなってしまうから、その線引きには実質的な視点が必要。たとえば形式的にみれば、あらかじめ穴を掘っておいてそこにおびき寄せて落としてしまうようなイタズラは、明らかな傷害（暴行）罪だし、廊下にワックスをひいて転倒させるイタズラだってそれは同じ。しかし、その程度のイタズラと、それによって生じるケガなら笑って済ませては……？

その点については賛否両論があるだろうが、私が言いたいことは、エネルギーに満ちあふれているはずの中・高校生であれば、エネルギーの発散が必要だから、それくらいのエネルギーの発露は当然だし、逆にそれがなければおかしいのではないかということだ。また、ケガはしない方がいいに決まっている。しかしそうかといって、ケガをしそうなことを全部避けてしまったのでは、社会に出てから一体どうなるの……？ やはり若者には、これくらいのエネルギーがなくっちゃ……。

2008(平成20)年1月31日記